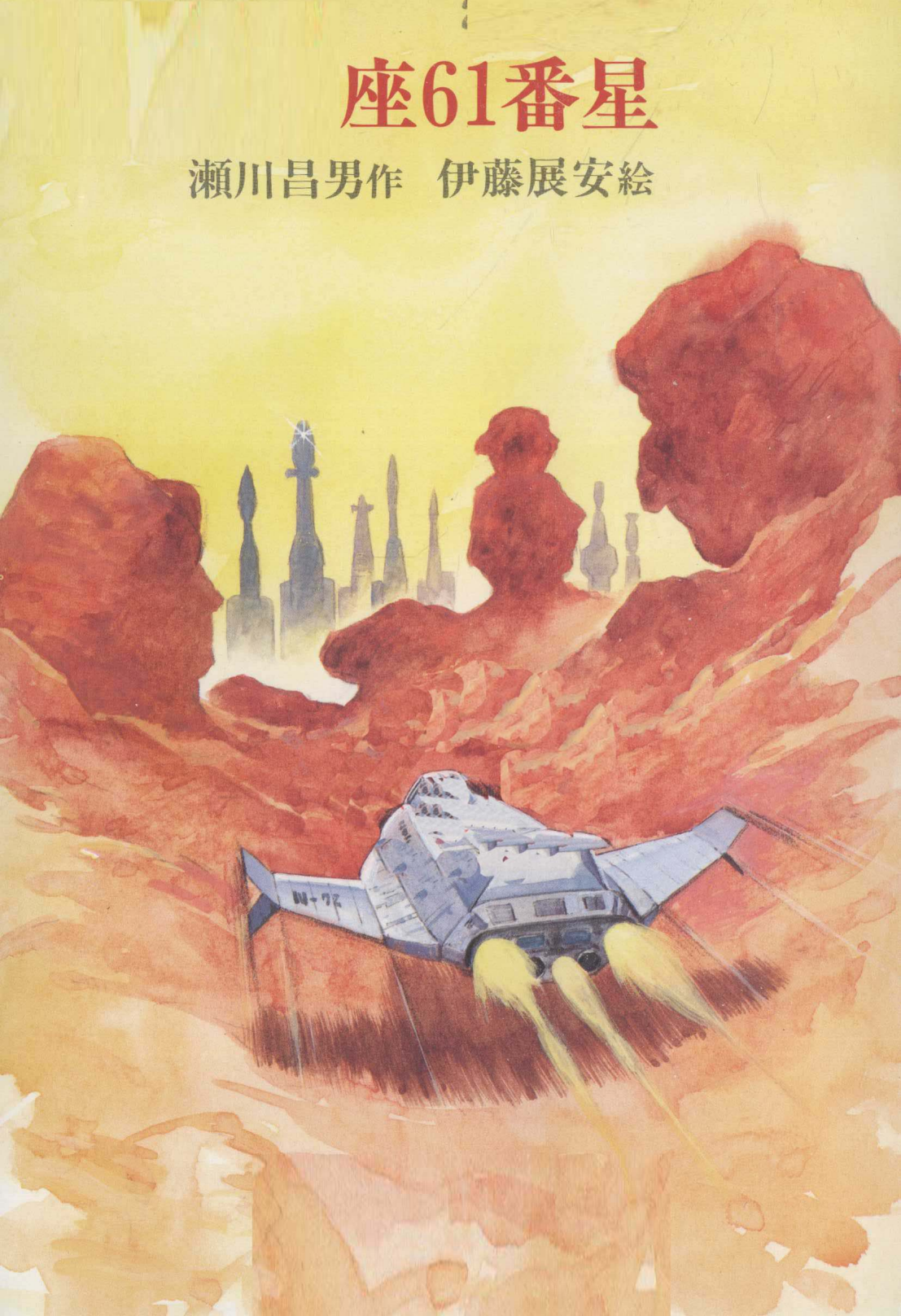
白鳥座61番星

瀬川昌男・作　伊藤展安・絵

座61番星

瀬川昌男作　伊藤展安絵



瀬川昌男

一九三一年東京に生まれる。東京教育大学卒業。日本心理学会、日本脳波筋電図学会、日本文芸家協会、日本児童文芸家協会所属。著書『火星の王女』『星と星座の伝説』全5巻、『アインシュタイン』『平賀源内』『たのしい星座ものがたり』全巻、『月への巨大な跳躍』など多数。

住所　東京都杉並区阿佐谷北2―17―15

伊藤展安

一九三四年山梨県に生まれる。児童出版美術家連盟、風ぐるまの会所属。おもな作品に『少年少女科学冒険小説全集』『アリババと四十人のとうぞく』『ガリバー旅行記』『十五少年漂流記』などがあり、この本の著者瀬川昌男氏とのコンビでは『火星の王女』などがある。

住所　東京都練馬区石神井台5―18―10

白鳥座61番星　　こみね創作児童文学・5

1985年3月25日　第1刷発行

*

著者／瀬川昌男　画家／伊藤展安

発行者／千葉紀雄

発行所**小峰書店**　東京都新宿区舟町6　☎03-357-3521

振替　東京6-195544

本文組版／厚徳社　表紙印刷／斎藤印刷所

本文印刷／厚徳社　製本／文勇堂製本工業

NDC913　ISBN-4-338-05705-X　©1985　Printed in Japan

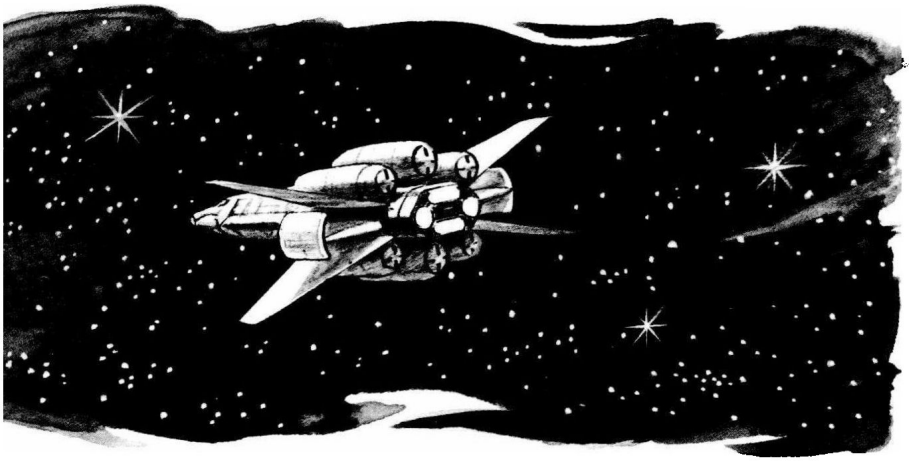
夜の空に美しくながれる天の川――銀河。

その天の川をはさんで、ひときわ明るく、灯台の灯のように、またたきかわしている星は、たなばた伝説もゆかしい〝こと座〟の織女星と〝わし座〟の牽牛星です。二つの星のあいだには〝白鳥座〟の十字形が大きくつばさをひろげています。その右のつばさの中ほど、やや後方にかがやくのが、この物語の舞台、白鳥座61番星です。

これらの星は、地球と太陽との距離の七十万倍、あるいは、もっと遠くにあります。わたくしたちは、あの星までとんでいくことができるでしょうか。そうです、人間が、光にちかい速さでとぶことができるようになったら……あの星へ行くことは、けっしてゆめではないのです。

わたくしは、いまから千年さきの世界を考えてみました。そのころは、光速にちかい速さの宇宙船が、太陽系の外の恒星間を自由にとびまわり、あちらこちらの星に、人間の住む新しい世界がきずかれているのではないでしょうか。地球のすがたも、人間の生活も、ずいぶんかわっていることでしょう。さあ、あなたも、この物語の少年少女たちといっしょに、千年後の空をとんでみてください。

著者



I 二つの宇宙船

地震の星 8

トレモよ さようなら 23

密航少年 39

スバル夫人の秘密 53

宇宙の祭典 66

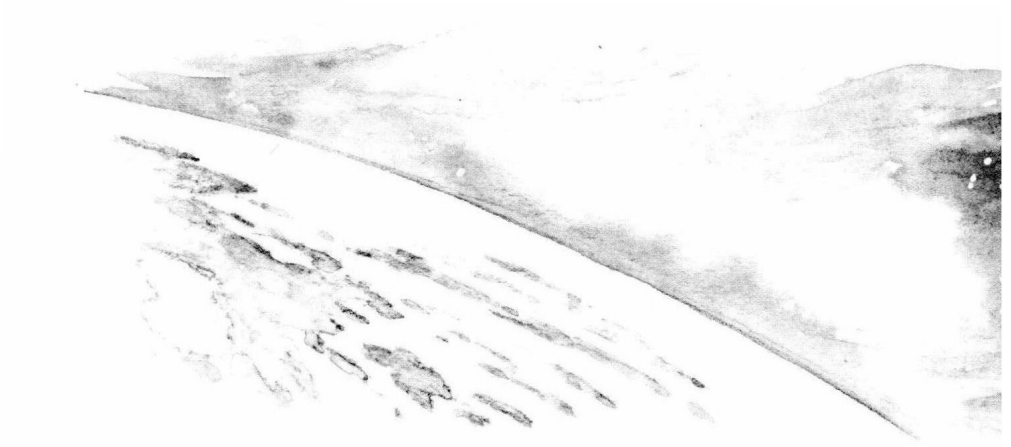
消えた調査隊 87

II たなばた物語

ロケットの林 100

プピの決心 122

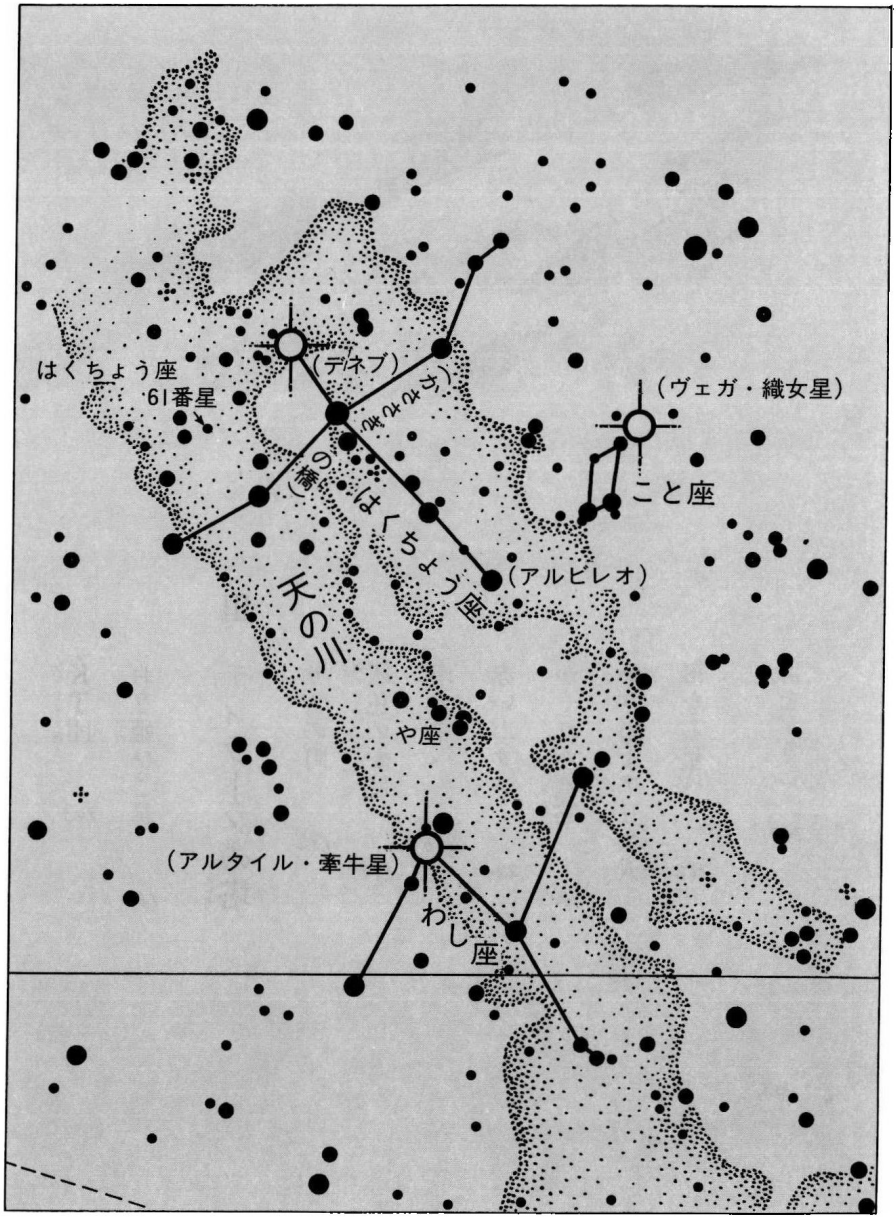
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



KT団　143
おり姫ひこ星　160

III

ティラーノの塔
サナの町　182
灰色のかげ　199
塔の中へ　216
赤いボタン　229
かくれた通路　245
めざめよアリス人　264
母なる星へ　282
あとがき　289



7月7日夜8時ころの東天

白鳥座61番星

I

二つの宇宙船（うちゅうせん）

地震の星

一

「さあ、いよいよ、このおへやともおわかれね……。プピ、あんただって悲しいでしょ？」
ルミノはソファに自分とならんでこしかけているロボット人形のプピに、やさしく話しかけた。
プピは、こくりとうなずくと、ほんとうに悲しそうに、金髪の下の青くすみきった目を、ルミノにむけた。ロボット人形とはいっても、生きた人間そっくりの少年の顔だ。
白色の螢光をはなつかべにかこまれた、がらんとしたへや。そのかべに、町を見はらすまどがある。
ドーム形の建物が、見わたすかぎり、泡のむれのようにたちならんでいる町……。だが、その町をとりまく空気は、いま、黄色くにごり、火山灰と硫黄性のガスがどすぐろくうずまいている。
地平線のかなたの空はまっかだ。町をかこむ大堤防にとうとうと打ちよせる、にえたぎった溶岩の怒濤の色が、空にうつっているのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あたしたち、この町から出ていかなくっちゃならないのよ。いいえ、この町からだけじゃないの。この星にさようならをするのよ……。」

「でも、なぜなの？　ルミノさん……。」

ロボット人形は、うたうような声でいった。

「あら、プピ、……あんた、まだそのわけを知らなかったの？　それはね、この星、こと座ヴェガ（織女星）系の第五惑星トレモの星民会議が、こんど決定したことなのよ……。」

二十五世紀ごろ、このヴェガ系の惑星に地球からの移民たちが住みつき、新しい世界をきずいてから、まだ六百年たらずしかたってはいない。だが、どうやらこの植民計画は失敗だったようだ。酸素と水にめぐまれ、いかにも住みよさそうに見えたこの星トレモ……。だが、それは、ほんのわずかなあいだのことで、やがておそろしい火山活動が、この星の地殻をゆるがし、地震、噴火、にえたぎる溶岩の海となって、地に空にあれくるいはじめようとは……。

「〝われわれは、このおそるべき地震の星トレモに、これ以上住みつづけることに、もはや、なんの意義も見出すことはできない。よって、われわれはここに、この星を放棄し、全住民の安全のために、ただちに他の星系へ移住することを決定する。〟……星民会議でこうきまったのだって。わかった？　プピ。そうして、きょうが、その出発の日なのよ。」

プピはまた、こくりとうなずいた。が、ちょっとくびをかしげて、

「でも……、それでいったい、どこへ行くの？　ルミノさん。よその星？」
「もちろんよ！　この星でなければ、よその星にきまってるじゃないの。空間人になってしまうわけにはいかないもの……。でも……。」
ルミノは、遠くを見る目つきをした。
「でも、あたしはもともと、この星の生まれじゃなかったんだわ。あたしは小さいとき、宇宙船にのって空をとんでいた……。」
〈ルミノちゃん！　ルミノちゃん！　早くいらっしゃい。そろそろ、出発よ。〉
ルミノは、はっとわれにかえった。だが、そのよび声は、耳にきこえてきたのではなかった。それは、ルミノの頭のなかに直接よびかけてきた声だった。
〈はい、いま行くわ……、エリねえさん。〉
ルミノは、その声でない声に、やはり声を出さずに答えると、ロボット人形のプピをうながして、ソファからたちあがった。
かべの一部分が左右にひらいて、ルミノたちを通してしまうと、また、ひとりでにしまった。
「ルミノちゃん、したくはすっかりできた？」
すらりとせの高い、美しい少女エリ、地球流にかぞえれば十五、六歳だろうか。そういえば、ルミノのほうは十二、三歳というところ……。

「ええ。したくといったって、なにもないもの……。あたしの荷物はこのプピだけよ。ねえ、プピ……。」

ルミノはにっこりわらって、人形をふりかえった。

〈プピか……。〉

べつの、声でない声がつたわってきた。エリの父、脳波工学者であるキリヤ博士が、声といっしょにあゆみよってくる。むすめにてせが高く、ひきしまった顔にやわらかな光をたたえて、ふたりの少女をおなじようにながめながら、

〈プピには、まったく骨をおらされたよ。いくらルミノのためとはいえ、わたしも、えらいおもちゃをつくってやったものさ……、はっはっは。重量制限で、家事ロボットその他いっさいのロボットのつみこみは厳禁されているのを、プピだけは、人間のように感情をもったロボットなのだからということで、やっとのことで許可をとったのだ。

もちろん、わたしは、はじめはプピをつれていくかどうかなど、べつに考えてもいなかったのだが、おまえたちに泣いてせがまれて、考えてみれば、人間とすこしもちがわないプピを、よろこびも悲しみも知っているプピを、このおそろしい星におきざりにするのもしのびない話だからね……。〉

「もちろんよ、おとうさま。プピは、機械にはちがいないけど、はたらきは一人まえの人間よ。ねえ、プピ！」

それを見ると、キリヤ博士は満足げにうなずいた。

〈うむ。われながら、たいしたできばえだ。……そうだ、いずれはプピにも、脳間通信装置をとりつけてやらねばなるまいて……。〉

脳間通信……これこそ、キリヤ博士の新しい発明であった。人間の脳からは、いつでも脳波とよばれるよわい電流が出ている。マメつぶのように小さいラジオのような装置を、頭のなかにとりつけることによって、脳波がほかの人にもつたわっていき、しゃべらないでも自分の考えを、相手にわからせることができる——。

キリヤ博士、エリ、ルミノの三人のあいだには、こうしておたがいに、ことばに出さないでも意思をつうじあうことができるようになっていたのである。

「さあ、港で溶岩艇がお待ちかねだ。したくができたら出かけるよ。」

エリもルミノもうなずいて、キリヤ博士のあとにしたがった。そのあとからプピもあるいていく。人間とちっともかわらない足どりだ。

二

家から一歩ふみ出すなり、ルミノは思わずたちすくんだ。

「まあ、すごい人のながれ！」

「うむ、みんな、港へ、港へといそいでいるんだ。さあ、まいごになるといけない、しっかり手をつ

ないで……。それから、ルミノもエリも、ベルトに足をとられないように……。」

港に通じる道路が、町の中をまっすぐにのびていた。

その道路の上には、何本かのはばのひろいベルトが平行にならんでいて、ながれるようにうごいている。人びとはその上にたっていれば、ひとりでに前へすすんでいく、べんりなうごく道だ。しかし、ひとつひとつのベルトは、すこしずつスピードがちがうので、二つのベルトに足をのせたら、たちまちころんでしまうのだった。

「ええ、気をつけるわ。こんな人ごみのなかでころんだら、おしつぶされてしまうもの……。さ、ルミノちゃん、しっかり手を……。」

「ええ、さあ、プピも……。」

早いベルトの上ほど、混雑がはげしい。すこしおくれるのはかくごのうえで、ルミノたちは、ややおそいベルトをえらんだ。

かけ足ほどの速さで、道の両がわの建物が、つぎつぎに前から近づき、そして、うしろへ遠のいていく。だが、それらの建物とルミノたちとのあいだには、すきとおったプラスチックのかべがあった。そのかべは、まるい屋根のように、ベルトロードの上をおおっていた。道は、透明なトンネルの中を走っているわけだ。

この星をつつむ大気は、地球とよくにており、多量の酸素をふくんでいたから、人間が生きていく

ためには、トンネルやドームの中でなくても、どこでも呼吸することができるはずだったが、日ごと夜ごと火山の噴火で、溶岩の海からたちのぼる硫化水素や亜硫酸ガスや、そのほか、さまざまのむせかえるような毒ガスのために、やはりそれをふせぐおおいが必要だったのだ。

建物がまばらになり、ゆくてに、えんえんとつらなる白い大堤防が見えはじめた。そのむこうの空は、火のようにもえあがり、煙がごうごうとうずをまいている。

「さあ、港まであとひといきだよ。」

キリヤ博士は、ほっとしたようにいった。

「人のながれがすこしへったわ……。」

「うむ、どんどんおいこされたからね。われわれも、早いベルトにのりかえようか。」

そのときである。

ひくい、ほとんど音としてはきこえないほどのうなりがひびいてきた。

「なにかしら、いまのは……？　あ、また！」

「地鳴りだ。地震がくるぞ！」

いっしゅん、むらさき色の電光が、人びとの不安な顔をさっとてらし出すとみるまに、

ズシン！

人びとは、ばねじかけの人形のように、一メートルもはねあげられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com